

歌集『あかね雲』より

登美子

五十年過ぎし写真の夫と

われ亡き人々に囲まれている

冬の間に溜まりし生ごみを畑に埋め

男爵芋の地作り急ぐ

池に添いし白きハウスに紅葉映ゆ

朝々小窓に眺めておりぬ

エスカレーターの手摺りにすがるわが体

若きがそつとささえてくれぬ

禁煙を誓いて何度も崩れおる

意思弱き子はわれが育てたり

もやゝの気持ち押さえて畑に出る

大粒の涙に見えし里芋の露

バスに乗り横に乗りたる老人の

読みたる税の本横目で読みおり

不燃ごみ出さぬと持ち行く朝の陽に

映ゆる鏡は母の形見ぞ

畑を打つ鋤を杖に立ち話

長き一と日をもてあましており

母の衣の間に残れしへその緒を

族やからに返して五十回忌終う

茹糠添え筍くれし友逝けど

今年はその子が持ちてくれたり

我が庭に四百年生きし赤松を

勞わいて薄き肥やる年の瀬の来ぬ

来年も生かさるるつもり

大根種取りて二十三年用と書く

もの言わぬ野菜と語りてひねもすを

畑に過ごしぬ春風と共に

征きし兄思いし母を偲びつつ

我が子や孫の平和を祈りぬ

無言なるを夫の優しさと知りつつも

昔のわれは否めておりぬ

白き追憶と開きしどくだみの

精気流るを摘みて干しおり

ひまわりは太陽に向て廻るなら

何時かは捻じれて切れてしまうが

椎茸の甘き匂の強くして

木洩れ陽の間にほだ木並べる

ほだの木の椎茸取りて焼く匂ひ

衣服に染みて一日離れず

ランドセルに蒲公英一本差してあり

蝶かと思紛い声かけてみる

堂前は揃えおかれし履物も

厠に行けば乱れてありぬ

わが歌の師に直されし一文字の

重き意味知る梅雨の一日

曇りきて使うこど気なき手鏡は

母の形見で捨つる気もなし

はらからと参りし母の墓に

香の消ゆるまで話は続き

エンドウの如き葛の実はじけ飛ぶ

シイビイビイの皮鳴らしてもみる

癒しえる事なき友見舞いおり

期待の言葉ばかり述べて病室辞す